方向

第二六号　一九八三年十一月一日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（九）

赤谷明海

〈昭和十九年十一月二十一日の項のつづき〉

▼十一月九日付大塚〈五郎〉先生はがき（二十一日受）

再度の御たより嬉しく拝見しました。満州の野に於て大いに元気にやつて居る事、それが何より心をあたためてくれる事であります。奉天、遼陽などといふところは、かつて満州旅行した時のかすか乍らも思ひ出のある土地、そこに君を居らしめてゐるといふ事が感慨深いのです。小生の体はよい方だとはいへないけれど、兎も角も勤めてゐるところを見れば、それ程でもないのかも知れません。しかし世間が苛烈になるに従つて、我々病者はいろいろ考へなければならぬものがあると思ひます。どうにもならぬ問題乍ら毎日沈思させられてゐます。一艸舎も集る連中も定り、その数もまことに少数だけれど、この三日にも研究会を開きました。かうして細々乍らも命脈を保つてゐるうちにはまた何とかなる事とも思ひます。大和へもさつぱり御無沙汰、君のゐない大和がかくも淋しきものとは――全く出て行く気がしないのです。従つて懸案の大和随筆もそのままです。歌は少々乍ら出来てはゐるが、全くこのところ不勉強で御恥しい。寒さに向ふ折柄、特に貴地は一層のこと十分に気をつけて下さい。

小生もこの冬さへ無事に越せたらと思つてゐます、ではまた。

〈これを最後に音信は絶え、復員まで内地の様子は判らない〉

○前送を達せられてからは、成るべく早く〈本〉部隊に到着する事が念願であり、途中何処かに止ることは〈が〉長ければ長いだけ無駄であり、従つて何処の練成班に編入なるかは当座の最大関心事であつた。出来ることならば直接南京へ行き、そこで武装出来れば一番いいがと願つてゐたが二十三日奉天駅に着き、そこからどんどんバスにゆられて奉天陸〈軍〉病〈院〉北陵別病棟第二分室に連れ込まれた時は、その規模の小ぢんまりとし、而もそれが今まで満支を移動しながら見た事もなかつた巨大な松や落葉樹の林の中にひつそりと建つてゐるのが気に入り、一先づ安心した。

ここの内部の習慣や規定が遼陽とどの程度違つたものか未だはつきり判らないが、病人とは云へ既に治癒前送の病人で、室は訓練班と云ふだけに、当然以前と同じやうな気楽さは求められない。然し奉天の本院とは違つて小人数な別病棟だけに、どことなく寛大でのんびりとしたところがある。給養等も相当良く、内務班も想つた程片〈固〉苦しくなく、今のところ何の苦情もない。室内は十七名収容の大きさに二ケ所ベーチカ〈ロシヤ式暖房設備〉があり、割合豊富に石炭もあるがスチームの様に温くはなく、初めこれではと心配したが、夜中はかへつて遼陽よりも暖く、便所通ひ〈夜の用足し〉も今までの三、四度に比べて唯一度に減つてゐる。今日は午後〈の〉体操後、夕食までブツ通しで馬鈴薯の選別使役に遇し、食後やつと少時を得てこれを記してゐる。(而も久し振りに机の上で)が何だか頭が朦朧として書かうとする事が纏らない。何れ又時を得て書き足すこととしよう

（一九、一一、二四）

満州第一四五部隊平岡隊北ノ二

〈これが当時の所属隊か。十日程留ったこの病棟は西欧人の邸宅か病院だったように思う。十字鍬で糞便の凍ったのを除いたり、凍土にむだな鍬を振り下すのが練成の作業であった。ペーチカに石炭をくべよと命じながら、前を離れない古兵殿の股の下を、韓信よろしく四つん這いになってくぐったのもこだったと思う。〉

〇北陵第二分室を出たのは三日の午後三時頃だった。約十日間の此処での生活は恵まれたものであり、それが後になって千代田分院あたりから来た者の話を聞けば、尚更以て楽なものであった。中隊内務〈班〉と同様の躾をつけると称し、間々気合の入れられる事はあっても大した事ではなく、寒気酷しい中での作業は相当辛かったが、さりとて長い時間のものではなく、それ相当の報酬もあり、何の苦情を言ふ筋合もなかった。それが奉天から此の天津福島街の分院（甲一八二九部隊塚越隊）に送られてみると、全くうその様な気楽さ。全然気合抜けがしてしまった。兵站宿舎同様の待遇で、食事と掃除以外は寝てばかり。清潔整頓とは云ふものの、室内の設備がもともと掃除など要らない様な雑パクへがらんどう？〉なもの、従って一日中殆ど何もする事がない。まして同室十名のうち九名までが二等兵で、他は衛生一等兵。誰一人気兼ねすべき者も居ず、のんびりしたものである。のんびりとしてゐるが寒さがひどく、風の吹き込んで来る部屋で、燃えにくいストーブを囲むことが能で、何一つ手につかない。便所へ行くのさへ憶劫である。奉天病院から奉天駅まで病衣一枚で歩いた夜と、天津駅頭に降り立った朝とを較べて、天津の寒さは知れたものと多かへ※原漢字〉をくくつてゐたが、此方も寒い。それに風

がひどく、建物の構造悪く、暖房装置又不備であり、室内は確かに奉天以上に寒い。夜は毛布一つ少ないせいもあつて、朝まで冷い足をかかへながら、えびの様になつて寝てゐる。

北支の者は、この病院を出れば全くの退院で、愈々追求へ本隊復帰〉を始める訳だが、中支へから来た者〉は更に徐州まで行かねば病衣を脱ぐ事が出来ない。奉天から一緒に来た北支患者は既に昨日発つて行つた。自分等は何時になるか判らない。然し正月が近づく事とて気があせる。何処でへ新しい〉年を迎へるやら。

天津の街は（と云つても駅からここへ来るまでに見た範囲内ではあるが）ぢぢむさく、道もきたないが、物資の豊富さは中支以上であり、従つて満州などとはお話にならない。昔内地の菓子屋が飾つてゐた以上のにぎやかな店頭、結構なものである。然し話にきけば、これが恐ろしく高価なものであり、一般人には全く縁がないさうである。普通人の経営してゐる喫茶店へ行つて、一寸したお茶をのむとすれば百円は飛んでしまふとか、以前聞いてゐた以上のべらぼうさである。

へ前後するが、奉天での記録に次のようなものがある〉へ※として○北支派遣軍の歌○於奉天別病棟岡田軍曹殿訓話修養訓○中国語日常会話○カトリック教より○若シ生キテ還ルコノアラバ○戒学院整理方針○覇太郎月夜唄○別れ船○誰か故郷を思はざる○湖畔の乙女○大利根月夜唄○白頭山節○長崎物語○梅と兵隊○湖畔の宿○蘇州夜曲○民謡チンダラ節。以上の主として書き抜きがあるが、ここには次の三項を掲げる〉

○カトリック教より

×各教会ハ宣教師ヲ宿泊セシメル義務ガアル（但シ宣教師ハソノ厚意ニ甘ヘテハナラヌ）

×牧師ハ絶対ヘニヽ妻帯セズ。教団規則ニ明示。神学校ヘヲヽ卒業シテ牧師ノ資格ヲ与ヘラレルモノ、極僅少。

×酒、煙草ハ許ス

×教会ノ経費ハ　信徒ニ割当テル

○若シ生キテ還ルコトアラバ

・研究科通学ハ時ノ気持ニヨル

・暇ノアル居所ヲ選ブ　法金ヘ剛院ヽ　招山ヘ唐招提寺ヽ

・飯ヘをヽ食フ道トシテ戒学院ニ勤務

・学業ハ四分本律ノ研究ヲ主トシ、戒律ノ取捨ニ積極的断定ヲ下ス

・学先ヅ終ヘ雲水的生活ニ還ル

○戒学院整理方針　ヘ帰国後の整理もこの方針と変りなしヽ

・特別書ヲ抜出

・形式ノ和洋ニヨル分類

・棚、箱別分類。箱ハ内容ニヨツテ一括

・最初ハカード二枚ヲ作成シ、一枚ヲ現品ニ挿ミ、一枚ニヨツテ分類ス。尚カードニハ通番ヲ付シ、大体因明、戒律等ト記シ置ク。和、洋モ記ス

〈「カトリック教より」以下は天津で書きとどめたものらしい〉

〈※　昭　和　二　十　年　一　月　八　日〉

○外界は真白に雪が降り敷き、まだ烈風が荒れ廻つてゐる。けふは〈二十年〉一月八日。中支〈徐州は中支・北支の境ぐらいか〉と云ひ、午後でもあるのに天津以上の寒さである。この寒さの中を今朝の四時に徐州の駅から病院まで歩いて来た。服装は夏の襦袢に夏の病衣、而も病衣は股を覆つてもすねはまるだしの短いやつ、病院に着いたときは身体の中心を失つてふらふらする始末。更に今はその夏の襦さへぬがされてしまつて、あてがはれた蒲団、毛布各一の中に、ふるへながら身をちぢめてゐる。これも〈後日の〉想ひ出の種と云へば云へるものの、今までの苦しい経験から〈しても〉余りにも無茶な待遇振りである。診療軍紀をやかましく言ひ、前送途中での再発を厳に警めて置きながら、どうしても風邪をひき益々その風邪をこぢらせずにはおかない処置をとつてゐる。自分等の如きは、去年の九月後送のために病院列車に乗つた時と、いま年改まつて前送の目的で同じ土地を逆行した〈する〉のとを比べてみれば、皮肉にも以前の方がはるかに元気で身体の調子もよかつた。

新年になつて何か所感めいたものを記す積りだつたのが、風邪で元旦から寝勝ちの日暮〈し〉を続け、五日の晩は殆どよくなつて熱も退いたが、翌六日の早朝福島街を発ち、天津駅まで歩く間にすつかり元に戻り、列車に入るや否や寝ついてしまつた。〈で、記すどころではなかつたというわけ〉今まで〈食べられずに〉他人に食事を与へた事もなかつた自分が、食欲を失くして人に食べて貰ふ様な事になつてしまつた。今朝三時半頃に起床して〈の〉無理な二杆の行軍で、又々逆もどりするのではないかと心配したが、案外今のところ熱は大したもので

はない。

〈数え年〉三十才と云ふ年は、云ふまでもなく今までとは代が変るだけに、心にかかる事が多く、人一倍年を気にする自分にとつて、はや三十代の人間に己を置いてみることが、この上もなく淋しい気がする。観念の上では、一日一日の現実の中に十分己を生かすことを考へながら、事実は空しい望〈み〉を遠き未来に置いて、毎日を空虚のうちに送り過してゐる自分であることを思ふだけに、三十といふみちめな敗北感を胸にやきつける。

〈これは一月八日、徐州の病院に着いての記。そこで治癒退院となり、南京へ向う。貨車で。〉

○一月十一日南京兵站宿舎第二宿舎二号室ニ入リ、天津ノ先発者等ト会ス。

○徐州に着いた夜〈一月八日早朝か〉、吹雪に逢つたが、相当広範囲に亘る大雪と見え、浦口〈南京の対岸〉までの沿道すべて真白く被はれ、ここ南京に於いてもまだ屋根に置いたものさへ解けきらない。中支は温かだらうと心たのみにして来たのが、なかなか以て内地以上の寒さである。今揚子江の減水期で大型の船が遡行出来ないとかで兵站宿舎は超満員。そのためか寝具は二人宛一枚の蒲団のみである。寒くて何も手につかない。

○南京の物価高実に驚くべきもの。僅か半年の間に十倍にも二十倍にも上つてゐる。支那酒一本三百五十円、饅頭一箇百円、南京豆一合約二百円と云つた程度。我々兵隊の給料では何一つ買へたものではない。重慶へ物資が流出するのを防ぐためもあると聞くが、この様なインフレの状況を目のあたりにしては、戦争の将来が暗くて仕方がない。〈当時の紙幣は儲備券〈ちょびけん〉といった。日本円と同単位だったか。〉

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（九）

原田寧雄編

〈一九三六（昭和十一）年〉十二月五日　午後、聖護院局消印、松ケ崎正田町〈以下同じ〉はがき。
昨日は大変うれしかつた。昨日は夕飯を仕度してあつたのださうだ、今度来る時は夕飯を食べる様にして来てく
れ給へ　不便なところだから何もないが、歌は出来ぬが兎に角三十一字をならべて喜んでゐる、よいものはない、
横臥して、　〈十一月二十七日、「脊髄カリエス」と診断され、以後自宅療養となった森田君を見舞った礼状。な
お、前号一五頁末行「整型外科病院」を「整形外科病室」と訂正する〉

十二月六日　午前消印。はがき。
蔵書印の押す場所と押し方を教へて下さい

朝鳥は軒に鳴けども鳥ゆえ〈ママ〉に悲しきろかも山茶花の散る（相聞二首）
鳥じもの今朝も来鳴けどうつそみのにんげんの我はかなしかりけり

以上茂吉のものに類似のものあつただらうか、小生しらべたが見当らぬ、君も心当りない？　批評乞ふ

十二月十七日　付、午前消印。てがみ。
早く礼状を出さねばならぬと思ひながら今晩になつてしまつた　夜おそくまで大変ありがたう
昨日は大学病院へ再度の診察を受け　に行つた　だ〈ママ〉うも機能不全といふのらしい　その方が僕にとつて
都合がいいが、〈陶器をやめて絵の方に進むことができようから、といつた含みであつたように記憶する〉

帰りに大丸で飯を食つてマントを買つた　すると丁度　其処で〈川田〉順の短冊（十円）〈岡〉麓の短冊（五円）
〈を見つけたの〉で麓のをよほど買ひたいと思つたがやめた　金がないから、
昨夜は眠れず睡眠薬をかけたので今日は一日頭痛がした　その上　製作上で（絵も短歌も）苦しむことが多いの
で興奮する。ことに作歌上で色々迷つてゐるが　これは何回か一生のうちでくり返へされる問題だらうと思ふ
病院の重くるしい気分を作らうと思つたが出来なかつた
　病院の便所に入りて見るとなく見れば板戸にほとの絵をみつ
それに又此頃作れなくなつた　これは暇があつても作れない　幾度かこの様な所をぬけたら進歩するのだらうと
思つてゐるが
歴代歌人論は面白く読んでゐる　それでも頭の散マンなためか時々頭痛がして止める　今月の投稿に次の様なの
を入れた
　読みながら頭の痛くなりて来ぬ前田寛治の画論といふを
しかしいくら散漫になつてもいい歌をみるとうれしい　ことにあの〈歴代歌人論〉中で〈木下〉利玄の
　春へうすづゝける彼岸秋陽に狐ばな赤々そまれりここはどこのみち
を発見して躍り上つた
〈伊藤〉左千夫のほろびの光もはじめてみた　しかし何と云つても利玄のはうれしかつた　この作だけでも近
代の第一流の歌人の貫録〈ママ〉をしめして余りある　これは別だが〈正岡〉子規の

わが口を触れし器　は湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

をみて非常にうれしかつた　アララギで〈島木〉赤彦も随分ほめてゐる

いちはつの花咲きいでてわが目には今年ばかりの春ゆかんとす

など何時みてもいい

水甕へは今日原稿を書き終へた　明朝発送する　〈安倍〉忠三の選はいやだが　仕方がない　詩と随筆は何とかならぬか　〈「詩と随筆」は大塚五郎先生の作品を掲載した雑誌の名かと記憶する〉

今日はこれで失礼　乱筆おゆるしを　　曠平　　枯魚大人

十　二　月　十　八　日　　午前消印。はがき。

賣といふ字が小生の字典にない　大体前後の文章で意味は通じるが念のため知らせてほしい

此頃は頭痛がして何もせずにねてゐる　君の近作あれば見せてほしい、「ひたぐもる空のましたの……」は非常にいい　猫〈の歌〉もいいがこの方がずつといい。僕も又送る。

〈大学は〉試験らしいが〈君は〉呑気〈にやっていること〉だらう　では又――　さよなら

十　二　月　十　八　日　　付、十九日午前消印。てがみ。

かくべつ用事もないのだが　手紙が書きたくなつたので書いてゐる　だからどんな事を言ひだすか分らぬが　そのつもりで……

今晩の京〈都〉日〈日新聞〉に青木木米の山水図が重要美術品に指定されたことが報じられて　その写真がのつ

てゐた　写真でみても実にどうも立派なもので　実物はさぞかし　と思はれるものだ
あんな美へママ〉事な芸術品を毎日座右に置いて見てゐられる人間はよほど幸福なものだ　全財産を擲つてでもほしいと思ふものだらう　この木米も竜虎秘書といふのを買ふために全財産をほり出したし〈柴田〉是真も自分の金どころか借金して　おまけに弟子の〈池田〉泰真が自分の家の土蔵を売つて　十六羅漢の絵を買つたが　あんな気持は　普通の凡人には恐らくわかるまい　二人とも親類一同に狂人あつかひにされたといふが　また凡人から見たらそれが当然なのかも知れん
君も知つてゐる通り青木木米は幕末の名工（陶器）で相当な学者だつたらしい　〈頼〉山陽や〈田能村〉竹田なんかを友人に持つてゐる位だから相当な人物だらう　高芙容の弟子で　大阪の木村巽斎のもとで陶器をみ、又陶説なんかを読んで　三十才頃から志をたてた人だ　それまで大阪で古銭の偽造なんかしてゐたらしい
あの〈急須作りの〉久太は木米のろくろ〈原漢字〉師だといふことは君も前から知つてゐる筈だ　木米は陶器でも随分逸品を残してゐるが絵も亦すばらしいものを描いてゐる　前に言つた様に　もともと絵かきとはちがふから絵は下手だ　しかし下手でもいい　その絵から起る迫力と気品とは実に恐しいものだ　やはり人物だと思ふ　竹田もい、弟子を持つたものだ　弟子といふより友人と言つた方がい、かも知れんが
ところで近頃の相場ではあ、いふ文人画の値が下つて四条円山派の様な写生風のものが上つてゐる　これは煎茶がすたれて抹茶が流行してゐるためだが　すぐれた芸術品が流行によつて値の浮動があるのは　いさ、か社会現象とはいへ　い、気持のするものではない　大たい　あんなものは金には全くかへることの出来ぬものなのだが

どうもこればかりは仕方がない

応挙は俗臭あり見るに堪えへママ〉ずとへ渡辺〉華へママ〉山が言つてゐるが　又あれはあれでいゝのだと思ふ

写生に立脚してあれ程の　仕事をしたことは偉いと思ふ　勿論中には随分いやな絵もあるが　それ以上のもの即所謂不朽の名作があつて　それは牽引される　誰でもさうさう傑作ばかりではないのだ　から

あの応挙といふ名は　君は知つてゐるかも知れんが　支那の銭舜挙といふ写生画の大家がある　これは小生の好きで好きでたまらぬ絵を描く人だが　彼も舜挙をみて感激し　舜挙に応ずるといふので応挙としたのだ　ついでに加へておく

平福百穂の絵はいゝ　彼も写生をとなへただけあつて作　品は実にいゝ　所謂実相観入といふかポエジーがあつていゝ　その植物の写生なんか目がまはる程すきなものだ

甚だとりとめのないことを描いたがゆるしてほしい　勉強の邪まになつたかも知れん

ではさよなら　今日は雨でいやになる　十一年十二月十八日　曠平　枯魚先生

十　二　月　二　十　一　日　午前消印。はがき。

手紙が行き違ひになつてばかりゐる　詩と随筆のもとのものも一度みせてほしいと思つてゐる

試験がすんだら一度遊びに来て下さい　岩波文庫のポオの黒猫　古本ヤにあつたら買つておいて下さい　たのみます

十　二　月　二　十　四　日　午前消印。はがき。

病気ハシテヰテモ年末トイフトヤハリ何カ身ヌチニ重大ヲ感ジテイロイロ用事ヲスル　ソンナ事ナンカデ少シモ便リヲ出サナイ　コノ間ノ手紙ハモラヒツパナシダガ何卒アシカラズ　暇ガアツタラ（何時モ暇デハアルガ）山端ノ方ヘブラブラ散歩ニ行ツタリスル

キノフノ夕方比叡山ニ雪ノ降ツタノヲミタ　歌ハ少シ作ツタガロクナモノハ出来ヌ、ソレモヒカンノタネダガウツシミノにんげんユエヘママ〉ニモロモロノカナシミハアルナリ　君ノ方ハズイヘママ〉ブンイソガシイダロー

十　二　月　二　十　五　日　付、二十六日午前消印。てがみ。

昨日は大変愉快だつた　ポオは全く素晴しい　アッシヤ家の崩壊なんか非常なものだね

今日　抽出しの整理をしてゐたら別紙の如き詩が出て来た、以前君に一度話したことがあると思ふが送つてみる

これは僕の大阪の友人が送つて呉れたもので　だいぶ前のものだ　この紙へうつすのが面倒だからそのまま送る

面白いものだから保存してくれたまへ、〈同封の詩は誰の作か分らぬエロティックな詩。省略する〉

今朝ちよつと上田敏の訳詩を読んだ　海潮音のあたりはあまり好きではないが　海潮音以後はい、と思つた　僕はやはりビアズレーの〈絵の〉様な調子の詩が好きだ　〈このあとに次頁の女の絵〉この絵は下手だが　神経が尖るとこんなものを求める〈このあとに木の枝のような絵、次頁〉　以上

二十五日一九三六年　曠平　　枯魚大人

はがき連句・紫陽花（下）

氷六・原田昌雄
櫟斎・原田憲雄

明治初年花の巴里に留学し　　櫟
丁髷ルックのカルナヴァルやゝ　　六
しの〻めの素足に春の草ふみて　　〃

ひと月足らずのうちに初折を終へて名残に入ることゝなりました。速い歩みのはうが気も乗るやうに存じます。長短句交替にて二句作らせていただきました。巴里では却つて丁髷がはやつてゐるのに驚くといふありさうにな

い話、次句は夜遊びに疲れたる女人。

隠遁の日々たのしかりけり

連句にもリヅムのあることが、やつてゐるとよくわかります。ゆつくりしたのもいいでせうが、わたしは早い方が性に合ふやうです。でも、あなたの本業の詩作のお邪魔になつてゐるのではないかと案じてゐます。お差支へのないやうにして頂いて結構です。「しののめ」が女人だから、わたしのは老人で付けてみました。若い比丘尼であつてもかまひませんが。

六月二日　六

四日　樸

たまたまは戒のひとつも破らばや

「若い比丘尼」のはうで続けてみました。少し変化に乏しいかも知れませんが。貴吟「日々」は副詞とみたく存じました。小生の「本業」に御心づかひ賜はり恐縮。週二句くらゐでしたら刺激にこそなれ、全く負担ではございません。

六日　六

ジュリアン・ソレル赤い服着る

尊句の比丘尼を男にしただけのやうで気がひけますが、字面だけは少し離れたでせうか。色の名をはじめて出したのがいくらか、といつたところでせうか。

八日　樸

雷のやうギロチンの落つるさま

こゝで冬ならばモスクワの雪になるのでせうが、恋もまだ先のやうだし、まゝなりません。

十日　六

鈴ケ森にぞ夕立は霽れ

やつと雨の降りだした日に「霽れ」では場違ひの感もしますが。おはがき、ポストからとつてきたこどもが、「たまたまはエビスのひとつも破らばや」って何？と問ひました。

十二日　樣

曲さなかさつとひけたる喫茶店

「エビスのひとつも」だと唐土の将軍かなにかの言、となつて、そのはうがい、かも知れませんね。「赤い服」への移りもピッタリですし：：少し付きすぎにはなるでせうが。さて、今回も固有名詞の後なので苦しみましたが、結局、普通の、どこにでもあるやうな地名と取りなしておきました。悽惨の境を「夕立」にて洗ひ清めていただき、感謝の外ございません。

十四日　六

駅のベンチの身代りの恋

知らぬが勝手の難題でご迷惑だつた でせうが、さつとかはかれ、さていかなる恋をと案じても、味気ない句しか思ひ浮かびませんでした。

鈴木漠さんから新詩集『抽象』恵投。一冊になると、一章一章がまた新たな意味を帯び、面白い展相を示すものだと、感心してゐます。

十五日　樣

切なさにただイニシャルを刺繍して

前回の拙句は恋を現代に持つて来たいといふ意図があつたのでした。貴吟「身代りの恋」は実にさまざまの場合を思ひ浮べさせて、小生はかういふ、ふくらみのある句に最も心ひかれます。で、その一つの場合を特定するのは付句の務めだといふ考へもあるでせうが、こゝではただ女学生あたりの身にあつたこと、いふだけにしたい

のです。

忘却の枠 純粋の爪

おはがきが来たとき、たまたま高橋達明氏の『マラルメの「Xのソネ」について』（人文論叢・23号）を読んでゐましたので、

Ses purs ongles très haut dédiant leur onyx,　と、

Que, dans l'oubli fermé par le cadre, se fixe　の句

から二語を引きちぎつて ならべました。少女の断腸を恋ならぬ枠組に乱雑に描いたといふだけのことです。

十七日　六

十九日　樣

どうも難問をいただきまして弱りましたが、「険韻」といふことを手づるに、

月にわが魄ほのめきて鐘乳石

前句から云へばこゝは「魂」のはうかとも思ひますが、どうも作者の執念深い本性が隠しおほせずに出てしまふやうです。初案の「月光の氷るしたゝり鐘乳石」は冬季となるらしく、又、「抽象と具象のあはひ昼の月」と鈴木氏に借りてもみましたが、付筋の明確ならぬまゝ、右の句を提出致します。高橋氏の論、ぜひ読みたく存じます。

二十日　六

秋風来たり天に響かへ

わたしもどうやら「魄」派らしいのですが、付合の都合上、「魂」をきどつて。

高橋氏の論文は、他にも三、四もらつてありますが『マラルメの「XYのソネ」について』のみ同封、ごらんに入れます。他はお立寄りくださつたとき。

あなたに手をとられて、どうにか名残の折端までた　どりつきました。裏が楽しみです。　二十一日　樑

少きを葉黄かざすをり尚のこと

内奥の幽暗から清冽たる高みへと連れ出していただきました。「天」と来れば日本のこと、するのは狭すぎると思ひましたので、これは無論、王維です（とはシャカに説法ですが）、山東の兄弟のはうの言、のつもりです。

高橋氏の論文、さつそく有難うございました。ゾクゾクッと刺激的な点では、先生の論考に優るとも劣らないものと存じます。昭和四十九年〈高橋氏論文作時〉といへば、次韻の孤独な作業に打込んでゐた時で、その頃なら余計に励みとなつたことでせう。精読させて戴きます。　二十二日夜　六

裏木戸あけて味噌売を呼ぶ

田舎から出てきた女中さんが、さびしくなつて裏木戸をあけたら通りかかつた、といふほどのつもりです。「て」が多くなりすぎるやうなので「味噌売とほき裏木戸の外」としてみたのですが、動きがないのでもとにもどしたものの、ぱつとせぬうらみあり。何かよい案はありませんか。

高橋氏のマラルメ、お気に入つたやうで何よりです。　二十三日　樑

「ふと味噌売を呼びとめる木戸」「呼ぶに味噌売とほき裏木戸」くらゐしか思ひ付かないのですが……「て」が多いのは小生のせゐで申訳なく存じます。例へば本来、貴句の「秋風来たり」は「来つて」とあつたのかも知

れません。（こゝは付句なので「て」が重つてもいゝのでは、とも思ひますが）。けふの『仕事人』は恰も芝居小屋とて

つくろへる顔ぢゝむさの女方

一応このまゝ付けましたが改変していただいても構ひません。

岩波文庫『逍遙遺稿』へ明治の漢詩人中野逍遙の集〉を辻井忠男さんが神田で見付けて、けふ送つて来てくれました。うれしい贈物です。

二十四日　六

「付句なので」とのご教示に従ひ前拙句はそのままに。

笑ふ判官　瞻（だく）ふませつつ

また固有名詞的で申訳ないのですが、「少年」では「少きを」とぶつかり「王孫」ではしやれすぎて合ひさうにありませんので。

文庫本『逍遙遺稿』はよい本です。神戸の図書館には原刊本がそろつてあるらしい。小生、下冊だけはもつてゐますが。

二十五日　櫟

口なほしに美少年をといふことでせうか。事典を引つぱつて、堀河夜討のことを。（しばらく動物のたぐひが出なかつたのでどうしようかと案じてをりました）。

根には矢の錆付けるあり花の庭

「根」は少々舌足らずながら「根元」のこと、通じますでせうか。さあ、これで小生の分担は終り、後は挙句

にて晴を点じていただくのみとなりました。両吟の緊張感はもとより得難きものながら、この解放の気分も、えも云はれぬものでございます。

二十七日　六

花の座がすばらしいので、挙句に気勢をあげかねるのですが、

末黒野にいま虹映ゆるかな

「虹」の季は夏のやうですが、「末黒野」によつて春のものと許されませうか。わたしの付けは俳諧といふより連歌みたいで、宗匠ならぼろくそにこきおろすだらうと思ひますが、あなたの忍耐と温情でここまでたどりつけたことに感謝します。ありがたうございました。

二十八日　檪

念　奴　嬌　―李清照（八）―　原田憲雄

わびしい庭／斜ふく風　細い雨　／門はみな閉めましょう／やさしい柳　かわいい花　寒食の節句も近く／さまざまに気がかりな空模様／むつかしい韻の詩はできたけど／酔いごこち醒めました／これはこれでしっとりした味わい／ゆく雁はわたってしまい／つもったおもいは寄せようもない

楼上は幾日も春寒く／四方のカーテンはおろしっきり／手すりによるのもものうくて／しとね冷え　香は消え　見かけた夢もさめてしまえば／かなしくても　起きねばならぬ／朝露こぼれ／桐　芽ぐみ／散歩に出たくなりました／日は　高く　霞きえ／また見あげます　きょうは晴れるか晴れないのかと

唐の玄宗皇帝の歌妓に念奴という美人がいた。歌うとその声は天上はるかに響いた。「この女の眼の色は人をうっとりさせる」と玄宗が嘆じたともいう。彼女にちなんで「念奴嬌」と名づけられた双調の詞は、前後段あわせて百字、だから「百字令」ともいい、「古梅曲」「壺中天」などさまざまの異名をもつ。また李清照のこの作そのものも「春情」「春日閨情」「春恨」「春思」などの題を冠せられる。いずれも他の人がつけたのであろう。どれもみな当ってはいるものの直卒にすぎる。

蕭條庭院、又斜風細雨、重門須閉。

わびしい庭。この庭は、中庭とでもいうべきもの。石を敷きテーブルをおき、晴れた日はそこで食事をしたりする。大きなのもあれば小さいのもある。一つだけではなく幾つもある家がある。清照の家のがどの程度のものだったかはわからないが、木や草が清らげに植わっていたことは間違いない。その清らげの庭がわびしいのは、夫と離れて独りぼっちだったからである。そこへまた、ななめの風、ほそい雨。「如夢令」にもそぼろの雨とはげしい風が歌われた。彼女にとっての雨と風は、ただの雨と風ではない。だからこそ、さそわれてさまよい出ようとする心をぴっしゃりと断ちきるように「門はみな閉めましょう」と自身に言ひきかす。大きな家は幾つもの中庭をへだて幾重にも建物がありその一つ一つに門がある。いわゆる重門である。「重門」を閉ざすということばは幾重にもおのれの心を閉じこめようとするいじらしい意志を表現して適切だ。

寵柳嬌花寒食近、種種惱人天氣。

だが柳はやさしい緑をふき出し、花はなやましく媚び、寒食の節句の間近いことをいや応なく思い出させる。

寒食は冬至後百五日の節句。西洋の復活祭にほぼ当り、人々はまりをけったりブランコにのって遊ぶ。王維には「寒食に汜のほとりにて作る」という詩があり、遊びたわむれる人々をながめながら独り旅する者のさびしさを歌う。その頃の変りやすい天気は人の気をもませるが、そんな気配もまたひとり閉じこもる女の心をさまざまに悩ませる。

險韻詩成、扶頭酒醒、別是閒滋味。

悲しみを忘れようとすると、ついお酒に手がでる。酔えば余計かなしくなる。ことさらにふみにくい韻字を選んで詩を作ってみる。だのにその詩もいつの間にか出来てしまう。ブランデイのように強い酒が、詩のできたころにはもうさめている。でも、むつかしい詩が作れたうれしさや、何やかやで、悲しみが薄れたわけでもないのに、しっとりとした感じの中にいる自分を見出すと、それも悪くはない。

征鴻過盡、萬千心事難寄。

北に帰る雁は渡ってしまい、このさまざまのおもいをあの人に寄せようにもすべもない。以上が前段。

樓上幾日春寒、簾垂四面、玉闌干慵倚。

「楼上」は二階。ひとり、とはいっても夫が不在というだけで、下男も下女もいて、節句が近づくにつれそわと落着かぬたたずまいがうるさく、二階の小部屋にとじこもったのであろう。幾日も春寒く、四面のすだれを日の中も垂れたまま。手すりに寄って外をながめようという気にもならない。

被冷香消新夢覺、不許愁人不起。

しとねは冷え、香爐の香も消え、やっとあえたと思ったあの人の夢もさめてしまう。かなしくっても、寝ている気にもなれない。

清露晨流、新桐初引、多少遊春意。

起きてみると、庭の草々はしっとりと露をおき、露はきらきら輝き、桐の木の枝々にうすむらさきの芽がふくれひらこうとしている。おもわず胸がふくらんで、ピクニックにでもゆきたいような気持。「遊春」とは春のみそぎの散歩をいう。『論語』に「春服すでに成り：：」という有名な一節があり、あれもいわば遊春である。

日高煙敛、更看今日晴未。

日がのぼり、かすみがきえる。さっきまでのふさいだ心がうそみたい。そうだ、今日は思いきって出てみましょう。そう思うと、こんどは、でもうまく晴れてくれるのかしら、またまた、それが気になって、ふと空模様をうかがってみる。

うれいに沈んだ女の心が、ふと目にふれた朝露と桐の芽にほぐされて明るく開いてゆく機微がじつにたくみに描かれている。その露と桐をうたう二句は、『世説新語』巻四「賞誉」の、溝ができてしまった友をふとなつかしく思いかえす王恭のエピソードを描く記事の語を、そのままそっくり使っている。この詞の中の女人と夫の離間にも、王恭とその友との事情を代入するのも、一つの解釈であろう。

この詞は批評家たちがこぞって評語をつけていて、それぞれが当っている。「情景兼ね至る」の語は短いが要を尽くしているだろう。

（一九八三年十月二十三日一六三〇）